



南極

創刊号

平成11年10月20日

南極倶楽部会報

『温故知新』

村山雅美

1953年、幸運にも僕はヒマラヤ黄金時代の舞台で端役をつとめる機会に恵まれた。その頃の山登りは大したもののでインドのラジオ局はマナスルの日本隊・エベレストの英国隊向けに毎日気象通報を流してくれていた。モンスーンがアンダマン海域に達したと聞き、登頂のチャンス到来とひたすら荷上げに喘いでいた頃のことだ。ふとペリーの黒船来航から丁度百年目の今年、よくも8000米峰を狙う身柄になったものだど独り驚いたものだ。

僕の興味をひく「過去帳」をひもどいて見ると日本人の地的外向志向（Geo-extrovert とでもいうか？）には50年周期があるようだ。ロシアの南侵に反応した伊能忠敬の蝦夷地測量は1800年、黒船来襲の50年程前までを第一期（1808年間宮林蔵の樺太探検）。黒船に始まる50年、1904年の日露戦争までを第二期（1899年河口慧海、1902年大谷探検隊）。おそまきながら帝国主義へのおつきあいに深入りしたあげくに身上を潰した素寒貧がお隣りの火事場泥棒で貯めこんだ1952年、日本国という半端な独立国になるまでを第三期（1910年白瀬隊）。悲願の国際復帰がかないヒ

マラヤ登山と南極観測がはじまり、今では一端の^{イッパシ}の^{テナ}大店を構えて2000年をむかえる第四期である。回を重ねて40次隊になった南極観測はマッカーサー憲法同様にかたくなに旧態依然の体制は載けない。複数の船舶による輸送・観測、飛行機によるアクセスの増強により越冬五ヶ月、夏隊七ヶ月体制等の実現を第五期（現行の第一期五か年計画）に期待したい。

観測隊・宗谷・ふじ・しらせのOB、NGOの有志が結集しての南極倶楽部の発足は、新しい50年を視野にまさに時宣を得たものである。昭和基地創世期の原人が尚「^{モイモシ}齒亡びて舌存す」（説苑）る今、故事・伝統の中から新しい価値・意義を引き出して欲しい。一方、当代の碩学たらんとするものが^{キビス}踵を接している。極地の最新知見を随時ご披露願いたい。南極倶楽部の楽しい酒席がこうして『温故知新』の場にもなるよう会員諸氏のご協力を切望して創刊の挨拶とする。

（1次夏）

宗 谷

三田安則

“宗谷”懐かしい船。しかし、『よくこんな船で南極まで行ったもんだ』と云われる。

ごもつとも。今見れば・・・今乗って

みれば・・・『本当にこれで南極まで行ったのか』と思う。が、行った。私はこの船で5回も南極まで往復した。可愛い健気な船。強い印象は二つ。

第一・・・よく揺れる船。私も Bilge Keel (彎曲龍骨) の無い船は初めて。全くよく揺れる。波もないのにユラユラリ・・・。

南シナ海でもマラッカ海峡でも、行き会う日本船から WAY (御安航を祈る)、宗谷から OVG (ありがとう・御安航を祈る) そしてどこでどう聴いたかは判らないが、『揺れは如何ですか?』と尋ねてくる。船乗りなればこそその興味と云えばそれまでであるが、正に国際的話題にまでなった。こちらも段々慣れてくるとヤケクソ半分で応答した。『快適であります』

第二・・・暑い、本当に暑い船であった。寒い南極へ行くまでには、赤道を斜めに横切って、インド洋を二十三日(当時)もかかってケープタウンまで辿り着く長い暑い旅路がある訳。

希望を出したが『贅沢』と云われた。冷房が入ったのは犬橋用樺太犬の『犬小屋』だけ。

第一次の東京出港後十一日目、『十一月十八日「防暑用ゴザ」支給さる』と日記に書いてある。クーラーなんて未だ未だ『高嶺の花』であった。花には手が届かないからと、犬小屋に潜り込んだ奴もいた。しかし宗谷では中央通路の舷窓のない一部の部屋を除いて、両舷側の舷窓のある部屋には、最後までクーラーは付かなかつた。我慢できなくて印度洋の海水をたっぷり浴びた猛者も居たようだったが・・・暑かった。

今は望むべくもない辛く酷しく、そし

て楽しい快適氷原小旅行。幌馬車ならぬウィーゼルで突っ走るオングル街道。乗組員も隊員とペアを組んだ。上乘り・用心棒・土方、あらゆるアクシデントにも対応できる体力が必要とされ、昭和基地を足で踏みしめ、出来ることなら南極の石を拾えると云う恩典を含めた温情による? ペアである。自分の記録を見ると、二月四日・二号車・ペア荒金隊員・二度クラックに陥没・十一時間四十五分(宗谷を出て帰還するまでの所要時間)。二月九日・一号車・ペア田隊員・基地交替要員四名便乗・九時間四十分。二月十一日・三号車・緒方隊員・パドル、クラック、吹雪・十二時間三十分。二月十三日・二号車・ペア村内隊員・基地のタイドクラック『花道』に転落、放棄して帰還・七時間。基地にて珍しき渦巻き状の石を採取、立見隊員の鑑定を得んと暖房暖かき船内に持ち込めば、アラ不思議、軟化・変形・臭気を発し始む。当時未だ基地に『はばかり』は無く雉撃ちと基地名物・雲母と砂による産物であった。

二月十五日離岸・涙・涙の別れ。そして二月二十八日までの悪戦苦斗。我れよく斗えり。

三月十日、ケープの緑が目目に沁み。一九五七年四月二十四日、東京・入港航路は『男の花道』汽笛・歓声・・・よくぞ男に生まれける。涙・涙。

(1次宗谷・航海)

閉鎖と再開

西部帳一

1962年2月、昭和基地はそれまでの越冬観測の幕を閉じようとしていた。灯台補給船だった海上保安庁の宗谷が南極観測船に起用されて、1956年秋、東

京港の晴海を1次隊を乗せて、初の南極を目指してから、6年の月日が流れていた。

この6年間の南極行は宗谷の改装、犬橇と雪上車からヘリへの輸送の変化、度重なる氷海での苦闘、福島紳隊員の遭難、タローとジローの生存等々、多くの先輩方が現地でまた内地でご苦労された上に経過したもので、多くの感動と、夢を私達に与えつけてくれたのである。

何時再開されるか予想もつかない中で閉鎖作業であったが、誰もが再開を信じ、その時には基地の機能が順調にスタートできることを念頭においていた。観測機器の整備はもとより、雪解けによる浸水を考へて建物のコーキングや、機器の床上げ等万全を期したものである。

発電機が止まり、最後の戸締まりをして、いよいよ昭和基地を去る時がきた。普段整理の行き届かなかった、野積の観測機材や、食糧の箱がキチンと整理されて、昭和基地は、箒で掃いたような光景であった。迎へのヘリを待つ間、村山さんと私は、発電機のエンジンの音がなくなった静寂の中で焚き火をしていた。ヘリが飛び立つと、食堂棟の屋根に日の丸が鮮やかに描かれていたが、やがて基地全体が遠ざかってしまった。

それから3年、新南極観測船ふじが就航し、7次隊によって観測が再開されたのである。再開第1便のヘリは、ふじの飛行甲板を離れて一路南下、見慣れたラングホブデの山並み、眼下の昭和基地を確かめるように上空を旋回し、氷海上にホバーリングしたのである。村山さんはイの一番に下りて基地に向かって、足早に前傾姿勢である。

4年の空白のあった基地は元のままで

あった。建物の中は、まるで冷蔵庫のように冷えきっていた。溶けた氷の水が浸水して部屋の中で再び凍っていたが、大した問題ではなかった。やがて、発電機が作動し、ふじと銚子との連絡ができるようになった。私の仕事は送受信同一場所による観測機器等への誘導電波の影響を一掃する目的で、送信棟をアンテナ島に建て、通信棟と別にしたのち、制御装置と、送信機、それを結ぶコントロールケーブルの敷設、ロンビックアンテナの建設と盛り沢山の計画であった。

その忙しい最中、吊り下げ輸送中のケーブル(850キロ)がワイヤーの切断で氷上に落下してしまったのである。パイロットの話では、まるで爆弾を落としたみたいというので、村山さんの指示もあって現場レベル47で飛んだのである。1時間したら、迎えにくるといって、パイロットの下村さんはかなりの高さから私を飛び下りさせたのである。何も無い氷海上で冰山や大陸の氷縁を眺めて、ひたすら迎えを待ったのである。時々、上空を大型ヘリが往復しているが、私をかまってくれない。とても不安な時間でもあったし、南極ひとりぼっちを、満喫することができた時間でもあった。その後、回収されたケーブルは若干の損傷はあったものの、夢のかけ橋として、その役目を十分、果たしてくれたのである。

終わりに、再開の原動力となったものは何かを考えると、親しまれた南極観測事業で国民が関心を持ち、国民の支持があったこと、再開に向けて、力のあつた要人に対して、あの手この手で、仕掛けをしたアタマのいい人がいたこと、ではないでしょうか。(7次夏・通信)

「ふじ」の思い出

久松武宏

私の「ふじ」との初対面は「ふじ」が第七次南極行動のため晴海埠頭を出港しようとしていたその日である。その後、縁あって「ふじ」に三回乗り組む機会を与えられ、私にとっては大変懐かしい船である。私の初めての南極行動は第十二次であるが、当時をふり返って思い出したことを書いてみたい。

フリーマントル 寄港中、日系の人達が歓迎してくれ、特大のビーフステーキをごちそうになった。当時の日豪の生活の相違にびっくりしたものである。ただ八エの多いのにはまいった。

暴風圏（往路） ある日、動揺が大きく、食卓に座って食事を取れるような状況にはなかった。おにぎりやタクアンの入ったカゴが士官室の天井から吊され、揺れて自分の方に近づいた時、タイミングよく手を伸ばして受けとる必要がある。身体は飛ばされないように士官室の壁に背中をピッタリと押しつけ、さらに、両足をふんばって体を支えるのである。

「はしる」「しぬ」 はしる（飲み物を持って、船内を歩きまわること）、しぬ（飲んで、その場に寝込むこと）等「ふじ」用語集を思い出す。

入浴 士官室の風呂は、我々ペーパーが入る頃には、湯は膝の下まで届かない状態であった。そこで甲板士官としての役得を大いに活用し先任海曹室の風呂で一番プロを楽しんだものである。

暴風圏（復路） ある晩、私は熟睡したまま上段のベットから落下し、尾てい骨をしこたま打ってしまった。熟睡していたもので一瞬何が起きたかわから

ず、タイタニック状態に落ち込んだ。

ケーブタウン 当時はまだ治安状況はよく、自由に街の中を歩けたが、単独行動は慎むように注意を受けていた。そのような状況で某幹部と上陸し、飲み食いした後、帰ろうとしたが「まだ帰らない」と、だだをこねられた。結局午前二時頃帰艦したが、朝食後、士官室総員集合がかり、副長から「甲板、は東京まで上陸止め」と申し渡された。某幹部のことを思い同行したのに、某幹部は取りなしてくれどころか知らん顔だった。ケーブタウン出港後、次の寄港地コロンボは政情不安のため寄港取り止めとなった。その際、甲板士官は“万歳”と叫んだと吹聴した幹部がおり、船内で大変なひんしゅくをかかった。

(12次ふじ・艦長付)

「センスイ長」のことなど

楠 宏

編集子から「宗谷時代の思い出、やはり言葉の話など」との注文を受けた。宗谷には「予備観」に一度だけの身、おまけに往時茫茫とて、特にやはり言葉は記憶が薄い。越冬隊では娯楽映画のセリフがはやりたりしたが、宗谷ではどうであったか、覚えていない。ただ船の職階制に準じて、隊側にもやたらと「科長」や「士」が生まれた。自然発生というより、「南極新聞」の朝比奈菊雄主筆が仕掛人とらんでいる。

揺れ止めのない宗谷はよく揺れた。南シナ海では台風で40度、南大洋では60度に及んだ。往きはシンガポール入港まで船酔（センスイ）で食堂に顔を出さぬ者、カゴ食の者などがでた。これらはセンスイ科に属し、センスイ長は伊藤洋平

(故人、医学担当)で、首席センスイ士は百瀬寛一(地磁気)、末席センスイ士に久我雄二郎(故人、気象)がいた。この他の科には独身科(朝比奈独身長)、妻帯科があり、後に接岸科(伊藤接岸長)や格納科(百瀬格納長)などが生まれた。

ヨッペイ(洋平)はシンガポールとケープタウンに入港すると真先に上陸し、モモカン(百瀬)は支給の高額な物品はすぐしまい込んでいたとのうわさからである。カミ(神)サンこと久我が言ったと思われるのに、ヒャク(百姓の百)がある。定点観測船で天気図作成の経験の深い彼は、気象電報(トンツー)をレシーバーで聞き乍ら直接天気図を書く神技の士であった。船酔いをする奴はヒャクだと言っていたが、後に遊びなどで未熟なことに使われ、「ワンハンドレッド」に変化した。ワンハンドレッドをケープタウンで使った男がいたとか、いないとか。しかしヒャクはまだ耳にすることがある。(1次夏・海洋)

ふじの船体の色

西部暢一

朱色も鮮やかなふじは、南極再開のシンボルであったが、こぼれ話の一つに、「船の色を決める時、船影は遠くからは、氷の中でもどこでもただ黒点に見えらると思うので、黒にすべきことを、ひとり主張したが、赤でなくては、観測船らしくないとの学者先生方のご意見に完敗したものである」と村山さんは、当時のことを書いておられます。私は、村山さんが何故、収熱効果に加えて黒にこだわるかその理由を密かに想像しています。

実は、軍艦旗をはためかすためには、黒でないとい合わないのです。そういえ

ば9次隊の極点旅行の雪上車は真っ黒でした。白い大陸で、それはそれは、軍艦旗がよく似合ったことは、いうまでもありません。その上、各雪上車にかつての連合艦隊空母の艦名をつけました。瑞鶴、翔鶴、飛龍、蒼龍。旗艦瑞鶴を先頭に翔鶴、飛龍が極点に到達、蒼龍は往路軟雪地帯のミッドウェー沖、現ドームふじ基地のNNE62度、76°30'S、42°02'E、標高3660mの地点を終焉の地とし、今は氷床中、2、3米深にあることでしょう。(7次夏・通信)

飯場棟

星合孝男

1965年の暮に氷海に入った「ふじ」から、昭和基地に飛ぶことになったのは、明けて正月早々であった。宗谷時代の諸先輩から「時間しか基地には居れなかった。」という類の話をよく聞かされていたので、S-61、81号機の中では、随分感激したものであった。しかし、基地の建物は少し淋し気で、その周辺は雑然としていた。

これといった特技を持たない私の仕事は、ヘリからの荷下ろしであった。食事やお茶は、風除けのベニヤ囲いの中の、ドラムの焚き火に当りながら摂った。皿の上の飯が、風上から冷えていった。基地の東側の低地に張ったテントで寝た。シュラフの中の体は、凍土から上る冷気のため、暖まる暇はなかった。それでも、早朝から深夜まで断え間なく飛んでくるヘリの荷下ろしの疲れで、次の晩には眠ることができた。

担ぎ降したパネルや鉄骨がまとまると、福島ケルンの脇で建て方が始まった。建物は丸2日とはかからずに、出来上が

ったと思う。3段の蚕棚がベットになる、収容人員40人程の建物であった。淡緑のパネルはあまり厚くなく、所々に隙間もあったが、蚕棚に延べたシュラフの暖かさの中で、私は熟睡した。そして、焼きたてのステーキの味は、船の中では味わえないものであった。天国、飯場棟。

しかし、年が経つにつれて、飯場棟に対する評価は低下した。「寒い。狭い。」というのであった。「外で寝るよりずっと暖かいよ、天国だよ。」という呟きなど聞こえる筈もなかった。1981年22次で夏隊員宿舎が出来るに及んで、飯場棟はその主たる任務を終えた。

今、国内では飯場という言葉そのものが、死語になったように思える。昭和基地の飯場がなくなるのも、無理はない。南極観測再開の時、あの建物を建て、あえて“飯場棟”と気取った男達も、やがて消えるのであろう。

(7次夏・海洋生物)

今、南極は(環境保護)

佐野雅史

南極観測を行うにあたって、何が変わったって、環境保護に関する網がかかったことが一番だ。

1991年の南極条約協議国会議で「環境保護のための南極条約議定書」が採択され、日本は批准のための国内法「南極地域の環境保護に関する法律」を制定、1998年1月に同時に発効した。

議定書は、南極の環境、生態系、風景など固有の価値の保護を目的にしており、汚染を防ぐために、南極に持ち込んで廃棄物になったものは、全て南緯60度以北に持ち出すことを義務付けてい

る。南極で処分できるものは、有害物質を出さない可燃物の焼却炉での処分、排泄物や生活排水など汚水の浄化後の海洋への排出などであり、例外として内陸氷床への汚水の埋め立てが認められている。昭和基地には汚水を生物処理する大掛かりな装置を設置、40次から動き出した。ションドラはもうすぐ死語になる。また、古い雪上車などの廃棄物デポは約500トンあると見込み、毎年100トンを持ち帰っている。しかし、みずほ基地やあすか基地など内陸部に残っている廃棄物の撤去は今後の課題で、容易なことではない。

国内法では、南極へ行く者は「確認申請書」なるものを環境庁長官に提出し、承認を受けなければならない。認められれば、全員に「行為者証」が発給される。今や南極に行くには免許証が必要になってしまった。

申請は、環境に影響を与える程度で、3段階に分けられており、陸上滑走路作成など一番影響が大きい行為は、アセス書を条約協議国に送り意見を聞かなければならない。

確認申請書は、今秋出発する41次隊から該当し、過日環境庁に提出した申請は80件で7cmの厚さになった。

(10次夏・設営)

新刊紹介

『南へ エンデュアランス号漂流』

小野延雄

今年3月、Ernest Shackletonの“SOUTH A Memoir of The Endurance Voyage”(1919)の全訳が、奥田祐士・森平慶司訳『南へ エンデュアランス号漂流』としてソ

ニー・マガジズから出版された。これまでの邦訳としては、文藝春秋の『現代の冒険 白い大陸に賭ける人々』に収められた抄訳がある。

アムンセンが先に南極点に到達し、スコットが帰途に遭難死したという悲報が届いた英国では、アーネスト・シャクルトンが“最後の大陸の最初の横断を、英国の探検隊によって成就させるために”と、ウェッデル海からロス海に抜ける南極横断「Imperial Trans-Antarctic Expedition」の企画に入った。

シャクルトン率いるエンデュアランス号(350ト)は1914年夏に英国を出帆、12月にサウスジョージアを出発して、ウェッデル海の海氷域に入った。1915年1月、後にシャクルトン基地が建設される大陸沿岸沖を流氷に連行されるように通過した。流氷と共にウェッデル海を時計周りに漂流しながら、冬を迎えた。強い氷の圧力で船が潰され始めたので、10月27日に船を捨て、氷上テント生活に入った。船は11月21日に沈むが、氷は更に北上を続けた。翌年4月、3隻のボートで全員エレファント島に上陸した。シャクルトンら6名は、隊員22人を島に残して、ボートでサウスジョージアに救助を求め、22人は8月末に全員無事に救出された。

一方、ロス海側では、支援隊が予定の補給所を設置したあと悲劇に見舞われ、マッキントッシュ隊長ら3名が命を落としていた。スコット小屋の近くを投錨地にしていたオーロラ号は、1915年5月12日に係留索が切れ、翌年2月まで氷に囲まれて漂流していた。

シャクルトンが果たせなかった南極横断は、1957～58年のIGYの年に、

フックス隊(英)が、南極横断のために建設したシャクルトン基地を出発して、南極点を通過し、スコット基地までを踏破して、43年後に実現した。

(3次夏・海洋)

会務連絡 南極倶楽部発足の経緯

渡辺興亞

11次と29次越冬隊に参加された坂本好吉さんが神田小川町に酒亭「おんぐるや」を開かれ、観測隊OBの溜まり場になっていたが、惜しくも夭折され、閉店の止むなくに至った。幸いにも越冬隊に3回参加された渡辺久好さんが引き継がれこととなった。それを機会に村山雅美隊長の9次隊の月例会も「おんぐるや」を会場にされた。私もその会に時折参加させて頂いていたが、平成10年の秋頃、村山さんからもっと幅広い定例会を開いたらどうかというお話があり、早速何人かと語らって準備を始めた次第である。亡くなった坂本さんも生前「おんぐるや」がそんな場になることを望んでいたということも縁の一つと思われた。南極のみならず広く極地に関係された方々に発起人をお願いし、本年1月に趣意書を発送するに至った次第である。会の名称を「南極倶楽部」とすることには村山さんのつよい御希望が反映している。

本年2月17日に第1回目の会合を開催するに至ったが、50数名の南極観測隊OB、「宗谷」、「ふじ」、「しらせ」関係、北極関係、極地旅行者などと幅広い方々が参集された。本会は当面、会則など定めず融通無碍に運営することとしたが、本会の会長を村山雅美さんをお願いすること、幹事は各分野からの2名で2

回つつ担当して頂くこと、会員名簿に記載された方を会員（記載順に会員番号が決まる）とすることといった基本ルールのみは最初の会合で了解いただいた。当分会費は集めず、定例会の会費の5%を事務的経費として運営することとした。会報発行の提案もあり、本年秋頃の発行を目処に準備を進める事となった。

これまで定例会は順調に開催され、毎回20 - 25名の参加をいただいている。幹事は「南極観測現役」、「しらせ」、「宗谷」と続き、今後は「設営」、「同行記者」の順にお願いすることになっている。南極倶楽部発会案内の発送先は経費その他の制約でかなり限定的になってしまったので、担当幹事が関連の方々案内し、会員の幅を広げて頂くのも幹事交代制の趣旨の一つである。

6月にはミッドウインタ - の集まりを極地研河口湖研修施設で開催し、15名の参加があり、村山会長の興味深い講話をうかがった。

南極倶楽部の運営は今のところ暗中模索といった状況で、是非多くの方に幹事（2回担当）を引き受けて頂き、自由な発想で楽しい会にしていきたいというのがこれまでの幹事の願いです。

また、「南極倶楽部」の発会パ - ティ（2月17日開催）の際、毎月の定例会合の子細が以下の様に決まりました。

幹事周旋担当 渡辺興亜
連絡先 Tel:03-XXXX-XXXX

南極倶楽部定例会合

開催日：第3水曜日（祝日に重なった場合は第3木曜日）

時間：18：00頃より

場所：「おんぐるや」、神田須田町1-4-4

Tel：03 - XXXX - XXXX

会費：3,000円

発起人代表：村山雅美（隊長）

田 英夫(報道) 吉田 宏(北極クラブ)
岡野 澄(本部) 鳥居鉄也(地球化学)、
三田安則(宗谷) 楠 宏(海水) 川口
貞男(気象) 村越 望(1次) 星合孝
男(生物) 五月女次男(北極) 松浦光
利(ふじ) 前田卯一郎(ふじ) 久松武
宏(しらせ) 吉田栄夫(地理) 木崎甲
子郎(地質) 小野延雄(海洋) 平山善
吉(建築) 五味貞介(東海南極クラブ)
小林昭男(医療) 小口 高(超高層)
大瀬正美(電波研) 西部暢一(通信)
清水晟夫、池田 宏(写真家) 佐野雅史
(設営、幹事) 渡辺興亜(雪氷、幹事)
(順不同)
(11次越冬・雪氷)

- 編集後記 -

創刊号発行のために依頼した原稿のほとんどは締め切り前に届きました。会員の意気込みが感じられました。「南極」は倶楽部会員相互の親睦を図るための会報です。寄稿、連絡事項などどんな内容でも歓迎します。なるべく原文で掲載出来るようにと考えております。

本誌の「南極倶楽部発足の経緯」にありますように、倶楽部には会則や会報の規定の様なものはまだありませんが、9月の会合で、会報は季刊(年4回)とし、住所録を除いて6頁ぐらいを原則とすることが決まりました。表紙のロゴマークは倶楽部の会員バッジをイメージしました。これからも未永くつきあって下さい。現在、原稿並びに編集幹事募集中です。編集に関する連絡先：神田啓史
Tel: 03-3962-4590; Fax: 03-3962-5743

会 員 住 所 録

会 員 番 号 / 氏 名 / 〒 住 所 / / e-mail

- | | |
|----------|----------|
| 1 村山 雅美 | 22 小林 正幸 |
| 2 小林 友一 | 23 中尾 保男 |
| 3 大久保 侃 | 24 清水 晟夫 |
| 4 大久保嘉明 | 25 楠 宏 |
| 5 渡辺 興亞 | 26 平山 善吉 |
| 6 小林 昭男 | 27 佐藤 守 |
| 7 西部 暢一 | 28 佐野 雅史 |
| 8 吉田 基二 | 29 大和田雅行 |
| 9 塚崎 展生 | 30 田 英夫 |
| 10 早川三次郎 | 31 安井 和憲 |
| 11 三田 安則 | 32 星合 孝男 |
| 12 只木 照二 | 33 北村 孝 |
| 13 高木八太郎 | 34 目黒 時雄 |
| 14 五月女次男 | 35 池田 宏 |
| 15 田中 正次 | 36 林 十海郎 |
| 16 島崎 里司 | 37 兵藤 裕 |
| 17 小野 延雄 | 38 松浦 光利 |
| 18 吉田 光雄 | 39 高野 孝子 |
| 19 久松 武宏 | 40 池田 由佳 |
| 20 柿沼 清一 | 41 向井 正興 |
| 21 駒形 登 | 42 藤井 理行 |
| | 43 川崎 巖 |

- | | |
|------------|----------|
| 44 大前 純一 | 65 小林 裕 |
| 45 増田 博 | 66 西野 正洋 |
| 46 吉田 栄夫 | 67 茂原 清二 |
| 47 松本 和子 | 68 白石 和行 |
| 48 神田 啓史 | |
| 49 高尾 一三 | 69 三橋 博己 |
| 50 小林 美波 | 70 宮尾 眞 |
| 51 倉田 篤 | 71 隅垣 掌帆 |
| 52 井村 次雄 | 72 竹内 貞男 |
| 53 鮎川 勝 | 73 渡辺研太郎 |
| | |
| 54 伊藤 尤士 | 74 柴田 鉄治 |
| 55 川口 眞男 | 75 佐々木昭人 |
| 56 五味 貞介 | 76 山崎 哲秀 |
| 57 小久保 壮 | 77 西部 美和 |
| 58 神山 孝吉 | 78 武田 守平 |
| | |
| 59 山岸 久雄 | 79 下田 泰義 |
| | |
| 60 須田 裕子 | 80 西村 浩一 |
| | |
| 61 山口 寛司 | 81 国分 征 |
| | |
| | 82 深瀬 和巳 |
| | |
| 62 三上 春夫 | 83 東 威 |
| | |
| 63 フルク ハイン | 84 掘間 義憲 |
| 64 関 隆三 | 85 吉野 正明 |